

わざ継承の学を構想する：能楽の技法を中心とする学際的な研究のために

YOKOYAMA, Taro / 横山, 太郎

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

40

(開始ページ / Start Page)

161

(終了ページ / End Page)

174

(発行年 / Year)

2016-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012835>

わざ継承の学を構想する

—能楽の技法を中心とする学際的な研究のために—

横山 太郎

いかに次世代へ自らのわざを継承するかは、いかに観客に優れた芸を披露するかと同じくらい——あるいはそれ以上に——能楽にとって最重要の課題であり続けた。しかし、実際のところ能楽師から能楽師へとわざはどのようなようにして伝えられているのだろうか。その継承の方法は時代とともにどのように変化しているのだろうか。こうした問題は、従来の能楽研究において扱われることがほとんどなかった。本稿で私は、このような研究分野を開拓するための方法論について検討し、従来の文献資料分析中心の演出史研究と接点を持つ新たな学際的アプローチの可能性について考察したい。

能楽のわざ

「わざ」という言葉は多義的だが、ここでは「身体をどう動かすかについての技能的知識」という意味で用いる（謡や囃子など音楽面での技術はひとまず含めない）。「技芸」「身体技法」「スキル」「達成すべき動き」などと言い換えることもできるだろう。能楽の場合、それは慣習的に「型」と呼ばれている。現在の能楽の「型」が、形式化された

所作単元の組み合わせでできていること、またそれがどのように構造化されているかについては、横道萬里雄の構造・技法研究が多くを解明した（横道 一九八七）。しかし、能楽の実演と継承の実際に即して見てみると、個々の型の内部、型と型の境目、あるいは型として同定されていない微細なレベルにおいて、未だ学問的な言葉で記述されておおよけになっていない、様々なわがが存在している。能楽において「わが」とは、したがって、単に個々の型とその組み合わせ（サシコミ、ヒラキ、左右といった手順）を記憶することにとどまるものではない。むしろ、記述困難な水準にこそわがの真髓があるといえるだろう。

振り返ってみれば、世阿弥の伝書もまた、こうした水準におけるわがを掴まえようとする試みであったとみることができる。たとえば金春禅竹に相伝した『拾玉得花』において「舞袖の一指、足踏の一響にも、序破急あり。是は、筆作に不レ及。口伝有り」と語るとき、世阿弥は「腕を上げたり足を下ろしたりするわずかな時間のなかで、その速度や重みの変化は序破急のリズムで展開されなくてはならず、そうすれば結果として美しい袖の動きや足踏みの音が実現するのだ」という技能的知識（わが）の伝達に言及している。そのわが自体（手足を序破急で動かすということが具体的にどういうことなのか）は、書き記すことは困難だけれども、口伝の場とともに身体を動かしながら口頭で説明するならば、伝達可能だと彼は考えている（それにしても、世阿弥は禅竹の腕の上げ下ろしを目の前にしながらいったいどのような指導をしたのだろうか？）。

このように、わがは師弟の当事者同士の間ではおおむねうまく伝わるけれども、そこでいったい何が伝えられているのか、いかにしてその伝達が可能であるのかを客観的に記述しようとする、とたんに困難に突き当たる。しかし、近年の人類学、社会学、その他諸学におけるフィールドワーク研究は、人が技能的知識を獲得したり伝達したりするプロセスをミクロのレベルで観察・分析する手法において、また知識概念そのものの理論的精緻化によって、わがの

継承プロセスを学問的に取り扱う可能性をひろげている。これらの成果を参照することで、能楽におけるわざの継承に新たな光を当てることができるだろう。

以下、そうした研究のうち、日本の伝統芸能に関連を持つ三つの研究をあげ、そこから能楽のわざ継承を考えるうえでどのような方法上の示唆が得られるかを述べる。^(二)

従来の研究

わざ言語

第一に、教育哲学の分野における生田久美子の記念碑的著作『「わざ」から知る』（生田 一九八七）と、そこから展開した二連の「わざ言語」研究をあげる（生田・北村 二〇一一等）。本稿がひらがな表記による「わざ」という言葉を用いるのは、もちろん生田の研究に拠っている。

わざ言語とは、師が弟子にわざを伝える際に用いる、比喩的な感覚の表現を通して直観的に行為の発現をうながす（要するに上手に何かをさせる）言葉である。たとえば、特定の手の動きをさせようとして、「手を右上四五度の角度に上げて」というふうに客観的・形式的に表現するのではなく、「天から舞い降りてくる雪を受けるように」と伝えるのがわざ言語である。このような比喩的な言葉は、教える側と教えられる側とが居合わせるその場の関係のなかでこそうまく機能する。したがってその場を離れて一般化することは困難だが、客観的な言葉では表現しにくい微妙な動作のニュアンスも含めて効果的にわざを伝えることができる。

生田のわざ言語論は、客観的に形式化可能な命題的知識 knowing that を伝えるのとは異なつた、技能的知識 knowing how（あるいは暗黙知）の独特の継承方法として、直観的に運動イメージを喚起する比喩的言語に着目し、

かつそれが有効に機能するための条件を徒弟制的芸道の稽古の中に見出した。たとえば一見不合理に見える内弟子の修行は、師弟間のコミュニケーションの共通の文脈を作り、弟子がわざ言語を理解するための基盤となる。生田はそれを「世界への潜人」と呼ぶ。このように、わざに対して師弟間で交わされる特殊な言葉遣いを通じてアプローチすることや、そうした言語的なコミュニケーションを師弟を取り巻く世界のあり方とリンクさせて考えることは、能楽のわざの継承を研究するうえでも非常に有効な手法となるだろう。

状況的学習論

次に、ジーン・レイヴとエティエンヌ・ウエンガーが『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』(Lave & Wenger, 1991)に示した状況的学習論をあげる。彼らは、仕立屋、肉加工職人などの生産業者を対象に、徒弟制的技能学習を分析した。そこで示されたのは、教師が丁寧に教えてくれる学校での知識習得とは異なった、わざの習得のプロセスである。徒弟制的な共同体においては、師や先輩が自分の技能を教えてくれるわけではない。学習者は、共同体の組織に徐々に参加することを通じてわざを身につける。そこで学習されるわざは、マニュアルのようにそれ自体で存在しているのではなく、そのわざを実践する人々の共同体のなかで、常にある特定の状況に埋め込まれて存在している。こうした分析は、わざの理解に大きな転換を迫る。わざは、個人の頭の中にモノのようにして存在していて、モノを受け渡すようにして教えられるものではない。それは、教授者や学習者がその一部であるような実践共同体の組織の中にあるのだ。

こうした見方——少しおおげさないうなら、わざの新たな存在論——は、能楽研究に対しても大きな含意を持つだろう。「型」もまた、個人の頭のなかから個人の頭のなかへと受け渡されるというモデルよりは、流儀や家のなか

存在していて個々人がそれにアクセスしているというモデルで捉えるべきかもしれない。あるいは、師はあらかじめわざを所有しているのではなく、弟子へそれを伝えようとするとき(師弟の実践共同体が生起するとき)に、はじめてわざがわざとして存在し始めるのかもしれない。仮にそうなら、流儀や師弟関係の性格と関連させながらわざの内実を考えるといったことも研究の視野に入ってくる。

レイヴ&ウエンガーの仕事は、一九八〇年代から進展した認知科学と哲学、人類学等の批判的な交渉のなかで、知識や学習における身体性の役割が認識されるようになった動向の重要な一部をなす。こうした動向をいち早く日本の芸能研究の文脈に取り込んで、人類学者の福島真人らは『身体の構築学』に結実する研究プロジェクトを展開した(福島 一九九五)。この大部の著作を少々荒っぽくまとめると、レイヴ&ウエンガーと生田久美子の仕事を接続しつつ、両者を乗りこえようとする試みだったといえる。ここでは、わざを共同体内部のコミュニケーションだけで捉えることの限界が指摘され、観客や市場といった共同体の外部だとか、メディア技術のような物質的条件の影響を考慮に入れるべきことが指摘されている。またここには、能楽の学習過程のエスノグラフィーとして先駆的な意義を有する、藤田隆則の論文が含まれている(藤田 一九九五)。「身体 of 構築学」の刊行から二十年が経ったが、そのインパクトを受け止めた能楽研究は未だ実現していないというべきだろう。

会話・行為分析と身体化の人類学

最後に、会話・行為分析と身体化の人類学をあげる。身体化 embodiment は、上述した認知科学と哲学の関わり のなかで広く使われるようになった言葉で、心のはたらきにおける身体 の役割を意味する。しばしば、心を外界の表象の処理装置として理解するオーソドックスな認知科学の考え方を批判する文脈で語られる(反表象主義)。人類学者

の菅原和孝を中心に、こうした身体化の考え方によりながら会話や行為を通じたコミュニケーションの分析をおこなう研究が、芸能伝承も視野に入れながら展開されている（菅原二〇〇七、二〇一〇、二〇一三）。

菅原らに限らず、人々が生きる現場を扱う諸研究（質的研究、エスノグラフィ、エスノメソドロジー、相互行為分析等々）は、会話や行為によるコミュニケーションを微視的に観察・分析することを通じて、当人同士も気づかない水準で何が生じているのかを明らかにする手法を発達させてきた。菅原はこうした分析を通じて、人から人へ意味やわがが伝わることを、〈片方の頭の中からもう片方の頭の中へとある表象が受け渡されること〉としてではなく、〈互いの身体がともに模倣したり応答したりすることのなかで間身体的に意味やわがが成立すること〉として解釈する。そこでは、前述した認知科学（批判）の動向も踏まえられている。それは、メルローポンティの身体の現象学を、コミュニケーションの人類学として再生する試みといえるだろう。

単純に言って、こうしたミクロのレベルに注目する分析手法が、能楽の稽古のコミュニケーションに対して適用されるなら、そこからは大きな成果が期待できるだろう。また、状況的学習論と同様に、わがを個人ではなく個人間の関係の中に存在するものとして捉える見方は、能楽のわがの理解にも大きな示唆を与える。わがが間身体的なコミュニケーションの次元にあるとするなら、たとえば師の身体と弟子の身体の関係次第でわが自体が変わっていくといった仮説に基づく研究が可能だろう。

わが継承の学問的意義と課題

技能的知識であるわがを伝えることと、客観的に形式化された命題的知識を伝えることの違いは、私たちが日常的に経験するところである。たとえば、ゴルフのスイングを教える際に、体の動きをこまごまと客観的に説明すると動

きがきこちなくなるが「チャーシューメンで振れ」と告げるとうまくできるようになる、といった程度のことは多くの人が経験しているはずだ。^(三)このように、師弟が特定の文脈や状況に埋め込まれているなかでは、直観的にイメージを喚起させるような方法や、あるいはいつそ教えずに模倣や観察を通じて自ら「わざを盗む」ように差し向ける方法が、しばしば有効である。そのことは、わざ言語、状況的学習、間身体的模倣・応答など、従来の研究が注目してきたわざ継承の方法に共通している。

しかし、考えてみればそれは不思議なことだ。そのような方法では、わざはコンピューターやロボットには伝わらない。「腕を斜め四五度上にあげる」のような客観的に形式化された(誰にとっても同じ意味が引き出される)命題知にしなくてはいけない。学校教育でも、従来そのような知識観で学習者である子どもに知識を伝えてきた。そもそも近代科学では「知」とは——なにかがわかる、なにかができるとは——そのように理解されてきたからだ。そのような知識観からすると、人間の技能的知識が暗黙的に習得されることは、不思議な、学問的に探求すべき現象である。人類学、社会学、教育学、心理学、民俗学、経営学、運動科学、ロボット工学や人工知能研究など、様々な分野がわざの継承に関連する問題を取り扱うゆえんである。

わざ継承をめぐる従来のフィールドワーク系の研究には、しかしながら、いくつかの課題があると私は考える。まず、これまでは技能的知識に特有の点のみを強調する傾向があった。すなわち、一見不合理であるかに見える(たとえばわざに直接関係のないお茶くみや雑巾がけをさせるような)徒弟制的システムが実はそれなりの合理性を持つことや、記号(言葉、記譜、写真、映像)による客観的形式化をあえて用いない直観的・間身体的な伝え方が優れていることが専ら論じられてきた。しかし、徒弟制以外のシステム(たとえば学校)や、記号によるわざの客観的形式化は、それ自体がわざの継承という「不思議」をめぐる重要なテーマではないか。にもかかわらずこれまでは、技能的知識

を客観的に形式化しようとする試み(たとえば能の型付のような記譜)がわざの継承においてどのような役割を果たすのかには、十分な関心を払ってこなかったのではないか。

いまひとつの課題は、「歴史的变化」が視野に入っていない、ということだ。ここで参照している諸研究が現在進行形の事象を観察するフィールドワーク系の学問である以上、仕方のないことではある。しかし、そのような方法上の制約以上に、私たちは技能的知識の継承のされ方を昔から変わらないものとして思い描きがちではないだろうか？ドキュメンタリー番組で能楽師の親子の稽古場面が映され、『風姿花伝』の一節を紹介しつつ「能楽は口伝で伝承されます」といったナレーションを聞いたなら、多くの視聴者はまるで世阿弥の頃から同じような稽古風景が続いているかと思うだろう。より一般的に言って、私たちはわざの継承のような民俗学的・人類学的現象に歴史はない(昔から変わらない)と考えがちである。しかし、たとえば能楽のわざ継承に関与するエージェント(行為の担い手)は、室町時代以降どれだけ変化してきただろうか。專業猿楽座の内部だけの時代から、パトロンの素人としての武士、そして学生やサラリーマン、女性たちへ。仮にそこでのわざの継承のされ方が常に徒弟制的だったり、状況に埋め込まれた直観的な方法だったとしても(そうではなかったと思うけれども)、その「徒弟制的」の内実が現在観察されるようなあり方のまま固定されてきたと考える方が不自然だろう。当然想定されるべき、わざ継承のされ方の歴史的变化は、従来の研究においてほとんど視野に入っていなかったといえる。

今後の問い——メディアと共同体

今後のわざ継承の学は、どのような問いを立てるべきだろうか。先にあげた課題をふまえ、第一にわざを記述・記録するメディア、第二にわざを継承する師弟が所属する共同体に焦点をあてて素描してみる。いずれにも共通するの

は、歴史的視点を導入するということだ。

メディア

これまで論じてきたように、言葉や記譜やビデオなどの記録メディアはわざの本質を伝えきれない(だからこそわざの継承の現場に対する徹視的なエスノグラフィ―が要請される)けれども、だからといってわざ継承においてメディアが重要な役割を果たさないということにはならない。新たなメディアの出現は、わざの継承の方法を――ひいてはわざそのものを――変化させる力を持つと考えられるからだ。五線譜は音楽の本質を伝えきれないだろうけれども、五線譜が出現してからの西洋音楽がどれだけ変貌を遂げたことか。能の型付は能の演技の本質を表現しきれないだろうが、型付が出現したあとの能の演技もまた、それ以前の能の演技とは同じではいられなかったはずだ。

このように、記録メディアは単に対象を記録するだけでなく、記録する対象を変えようという視点に立つなら、わざを記録するメディアの歴史的変遷の研究をエスノグラフィ―的調査の成果と結びつけることが、わざ継承の研究にとって次のステップとなることが了解されるはずだ。たとえば能楽を含む現在のさまざまなわざ継承の現場の調査を通じて「記譜(型付)や記録メディアは実際にはどのように稽古で利用されているのか」「わざが記録されることは、わざの継承のされ方にどう影響するのか」「その影響は、言葉、記譜、映像、ビデオ、CGでどう違うのか」といった問題について理論的知見を獲得し、それを過去のメディアの歴史的変遷(たとえば近世初期の型付の出現とその後の精細化)にあてはめることによって、「当時であって型付はわざのあり方をどう変えたか」といった問題を探求する可能性がひらかれるだろう。

共同体

徒弟制的・暗黙的なわざ継承の場として、生活世界を共有するような伝統的共同体は、理想的なモデルといえる

(本当にそれが「伝統的」なのかはひとまず措く)。そこでの一見非合理的な伝承システムは、かつては封建的といつて批判されたけれども、上述した諸研究はむしろそこに合理性を見出したのだった。しかし、だからといって、徒弟制やそこでの「合理性」自体が、ときどきの歴史的条件の中で変容していかないとは限らない。「最近の弟子は怒ったらずぐやる気をなくす」といったしばしば聞かれる語りは、徒弟制がそれ自体変容していくということ、そしてそこでの合理的なわざ継承のされ方もまた変容する(たとえば怒ることは合理的ではなくなる)ということを示す。一方で、徒弟制と単純に対置され、一般化されたカリキュラムに基づくわざの学習がおこなわれていると思われるがちな学校のような近代的な組織についても、その組織のあり方が変動し、それにもなつてわざの継承方法が変化する可能性や、実際には徒弟制的な要素が潜在している可能性が考慮される必要がある。

こうした観点から、たとえば「共同体の中のわざの教え方は百年前と五十年前と今とでどう変わつてきたのか」「稽古以外の世界をともにしない教授者と学習者が稽古をしているときに立ち上がる共同体とはどのようなものか」「芸能が学校で教えられるようになったり、学校組織が変化することで、わざにどのような影響があるのか」「能楽のわざが素人弟子に教授されるようになったときにわざ継承のあり方にどのような変化があつたと推定されるか」といった問いを立てることができるだろう。

結び——わざ継承の学における能楽研究

フィールドワークや実験・観察等による、わざ継承の現場に対する研究は、社会学、人類学、民俗学、経営学、スポーツ科学、生態心理学等において進展してきた。一方で、芸能史(演劇史、舞踊史)研究はわざの継承に関わる過去の文献資料を蓄積している。本稿が提唱する新たな研究プログラムは、ジャンルを横断しながら歴史研究の手法と

フィールドワーク的研究の手法を交叉させようとするものだ。それは「歴史的視点を内包したわざ継承の現場研究」であり、「現場研究の視点を内包したわざ継承の歴史研究」である。こうした学際的な試みにおいて、能楽という分野はどのような役割を果たしうるだろうか。

能楽研究には他のジャンルや学問にはない、特権的と言つてよいほどの恵まれた条件がある。第一に、伝書や型付といった、わざ継承の当事者が書き残した文献資料の膨大な蓄積があること。第二に、継承され続けてきたわざを現に生きて担う能楽師たちがいること。多くのフィールドワークの対象は歴史資料を欠き、逆に歴史研究の対象は現在までの直接の伝承が途絶えている(たとえば西洋の宮廷舞踏は多くの舞踊譜や文献を持つが、現在はそのから復元されたものが踊られている)。これに対して、能楽はいわば「生きた歴史」であり、フィールドワークから明らかにされる現在のわざ継承に関する知見と、歴史資料から推定される過去のわざ継承に関する知見とを、相互にフィードバックさせることが可能な数少ない対象の一つといえる。さらにいえば、これまでの能楽研究の先達が、能楽師との間に信頼関係を築いてきたために、概して能楽師が研究に対して協力的であることも、大きな財産である。以上のような「贅沢な」状況を活用した技法研究は、ようやくその端緒についたばかりである。そうした研究の進展は、他分野の研究にも役立つ知見を生みだし、わざ継承の学へ大いに貢献するだろう。

最後に、本稿で扱うことのできなかった二つの論点について補足しておきたい。ここまで、定量的な研究、つまり身体動作の計測に基づく科学的な分析に触れてこなかった。既存の研究については、「わかっている人にはわかっている結果しか出ない」という冷淡な反応が(特に能の技法に通じた人からは)多いように思う。しかし、この分野もエスノグラフィや質的研究との接合によって大きく進展する可能性があると(四)思う。

もう一つ、本稿は人類学との対話を一つの柱としているにもかかわらず、最近の人類学における、文化と自然(人

間と非人間)をフラットに扱う傾向にも触れていない。^(五) ラトゥール、デスコラ、ストラザーンらの仕事はわざの継承といった芸術的事象に対して持つ含意について、私自身が十分に消化し切れていないためである。たとえば能面、足袋、装束といったモノたちを、わざ継承を成立させるエージェントとして役者とフラットに扱うといった方向が予想されるが(実際に能楽以外の民族誌においてはそのような例がある)、安易に利用するなら、単に「能面」という語を論文中で目的語から主語に移動しただけのものになってしまいそうだ。しかし、たとえば木綿の足袋と滑らかな床という物質的条件の成立なしに、今のようなハコビのわざもないであろう。わざにとつてモノが重要なアクター(行為者)であることは確かだ。役者が歩いているのではなく、鼓の音、地謡の声、物語、床と足袋、観客のまなざし、役者の脳、ハコビのわざといったアクターの集合体とその役を歩かせている、といった現象記述も魅力的ではある。今後の検討課題として結びにかえたい。

参考文献

- 生田久美子 一九八七、『わざ』から知る』東京大学出版会(改訂版 二〇〇七)。
 生田久美子・北村勝朗編著 二〇一一、『わざ言語——感覚の共有を通しての「学び」へ』慶應義塾大学出版会。
 春日直樹、二〇一一、『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』世界思想社。
 現代思想、二〇一六、『現代思想3月臨時増刊号 人類学のゆくえ』四四(五)。
 倉島哲 二〇〇七、『身体技法と社会学的認識』世界思想社。
 菅原和孝編 二〇〇七、『身体資源の共有』弘文堂。
 菅原和孝 二〇一〇、『ことばと身体——「言語の手前」の人類学』、講談社。

菅原和孝編 二〇一三、『身体化の人類学——認知・記憶・言語・他者』世界思想社。

田辺繁治・松田素二編 二〇〇二、『日常の実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社。

福島真人編 一九九五、『身体の構築学——社会的学習過程としての身体技法』ひつじ書房。

藤田隆則 一九九五、『古典音楽伝承の共同体——能における保存命令と変化の創出』福島 一九九五所収。

茂呂雄二 二〇〇一、『実践のエスノグラフィ』金子書房。

横道萬里雄 一九八七、『岩波講座能・狂言(4) 能の構造と技法』岩波書店。

Lave, Jean and Wenger, Etienne 1991. *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press. (ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー、佐伯 胖訳、福島真人 解説 一九九三、『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』産業図書)。

注

(一) 本稿は、共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」の公募プロジェクトの一つ「現代能楽における『型』継承の動態把握——比較演劇的視点から」(研究代表者：横山太郎、分担者：山中玲子、中司由起子)の成果の一部である。このプロジェクトにおいて私たちは、様々な分野の専門家を講師として招き、各分野におけるわざの継承について研究会を重ねた。その成果をひろく公開するために、二〇一五年一月一三日に、研究会に参加した講師を一同に集めシンポジウム「わざ継承の歴史と現在——身体・記譜・共同体」を開催した。本稿は、このシンポジウムの冒頭に私がおこなった基調報告をもとにしている。いちいち注しない場合も、ここで述べることの多くが、シンポジウムにおける諸氏の報告に負っていることを謝意とともに記しておきたい。

(二) これらの日本の芸能に関連を持つ研究のさらにルーツには、身体行為と知識形成をめぐる多くの研究がある(モース、ブルデュー、ライル、ハワード、ポランニ、ヴィゴツキー、ガーフィンケル、ゴッフマン、ギブソン、レイプ&ウエンガーなど)。ここでいちいちに言及する余裕はないが、福島 一九九五、倉島 二〇〇七、菅原 二〇一三等に要領よくまとめられている。その他、本稿に関連するエスノグラフィの先行研究として田辺・松田 二〇〇二、茂呂 二〇〇一などを参照した。

(三) ゴルフスイングにおける「チャーシューメン」は、ちばてつやの漫画『明日天気になあれ』(講談社、一九八一〜一九九一)が生み出したものだ。それが実際に有効なわざ伝達の方法なのかはともかく、この掛け声が人口に膾炙しているのは確かだろう。その事実は少なくとも、この作品におけるこうしたわざ言語の描写が多くの人の実感(客観的説明よりも直観的掛け声の方がうまくいくという実感)に合致したことを示すだろう。蛇足だが、チャーシューメンは序破急に似ていないだろうか？

(四) こうした研究の可能性を示した例として、CGによる型付の解析を演者の暗黙知に結びつけようとした山中玲子らのプロジェクトがあげられる。科学研究費助成事業「3DCG所作データベースに基づく能の「型付」資料未記述部分の解明」(研究課題番号二一六五二〇二三)。

(五) ここでも、いちいちの研究をあげる余裕はなく、またその意味もないので、ひとまず以下をあげるにとどめる。春日 二〇一一、現代思想 二〇一六。